



「水のある風景」―「霧が湧く竜頭の滝」 栃木県 奥日光 写真・文：泉谷玄作

竜頭の滝には、季節を通して訪れている。トウゴクミツバツツジが咲き、まるで大地が呼吸をしているかのように霧が湧いていた。天と地の気が自然と調和しているのだろう。撮影していて気持ちが高揚していくのが判る。よく地に良い場所や悪い場所があると耳にするが、やはりその場所に行ってみないと感じないものだろう。風水や気学の違いなどと難しいことよりは、身体が心地よいのが一番なのかもしれない。

海からのメッセージ

会長 菅原 三朗

県建設業協会、恒例の2007新春講演会が2月19日、水中写真家中村征夫氏を講師に「海からのメッセージ」の演題で開催された。中村征夫氏は1945年秋田県潟上市生れで、20歳の時に独学で潜水と水中写真を始められた著名な水中写真家であり、海の報道写真家としても活躍。数多くの受賞歴や著書も多数ある。

中村さんははじめに今日迄40年に及ぶ写真家人生の中で、只一度だけもう水中写真家をやめようと思ったことがある。それは平成5年7月12日北海道奥尻島でNHKの特集番組にレポーターとして出演していた時、その夜北海道南西沖地震に遭遇した。地震が起きた午後10時17分頃、堤防から約30mの民家でNHKのスタッフとビデオの試写をしていた。横揺れから突然激しい縦揺れとなった。電気は切れ部屋は真っ暗、壁に張り付かないと立ってられない状態で揺れは30秒近く続いた。宿の女将さんが逃げてえと泣かんばかりの声で絶叫。水中カメラなど機械が気

がかりでいると、「何をもたもたしているの、逃げてえ」と怒鳴られた。外ではじいちゃん・ばあちゃんと住民の声が飛び交っていた。「ゴー」と言う津波の音が、真っ暗で何も見えず恐怖感を一層募らせる。はだしのまま、裏山を必死で登った。その途中海が真っ黒い雲のように覆いかぶさってきたかと思った。「バーン」と津波が覆い被さる大きな音がした。地震発生からわずか5分後だった。さらに裏山を登り地元の人から、この高さなら大丈夫と言われ初めて助かったとほっとした。集った住民は涙を流しながら家が燃えさかるのを見つめていた。堤防も宿も跡形もなく消え去っていた。水中カメラなど8台を宿に残しての脱出であった。

冒頭このような体験談が語られ、次からスライドを使用しての講演となった。知床半島に集ってくるカラフトマス群の写真が写し出された。2005年知床半島が海域の一部も含まれて世界遺産に指定された。この認定は世界でもめずらしい例である。その最大の理由は海の恵みが知床半島の森の自然を育てていると認められたことにある。通常では森の恵みが海を育てていると言われている。豊富な植物性プランクトンが川や地下水を通じて海に流れ込み、海洋の生態系に大きな影響を与え

ていると考えられているからだ。だが知床はそればかりではない。冬にはロシアのアムール川が凍りつき、その豊富な栄養を含んだ水が流水となって知床半島を覆い尽くす。流水とともにタラをはじめ多くの魚が知床半島に姿を現すのには理由がある。接岸した流水を海中から見上げると黄緑色に変色している。これは流水の中に溶け込んだアイスアルジー（植物性プランクトン）が光合成をして増殖をはじめたからである。その植物性プランクトンを食べようとたくさんの動物性プランクトンが沿岸に集まってくる。それを小魚が食べ、ひとまわり大きな魚が小魚を捕食していく。初秋の9月沿岸にはサケやカラフトマスなどが産卵のため河口域に集まってくる。遡上をはじめたサケやカラフトマスは待ち受けていたヒグマに次々と捕らえられ、栄養価の高いイクラ以外はその場に放置されてしまう。そのおこぼれをキタキツネなど、他の小動物が森へと持ち帰る。この時期の餌の魚はいくらでも手に入るので、森のあちらこちらに魚の残骸が散乱することになる。それらはやがて土となり、肥しとなって森を育てるのだ。知床半島の世界自然遺産に、海の一部も指定された理由はここにある。と解説した。

海からの メッセージ

2007新春講演会、
中村征夫氏を講師に招く

2月19日、秋田ビューホテルにて、秋田県建設業協会、秋田県建設産業団体連合会、秋田県建設青年協議会の3団体の共催で「2007新春講演会」が開催され、関係者並びに一般から100名余りが集まり、本県出身の水中写真家・中村征夫氏の講演に耳を傾けた。

講演は「海からのメッセージ」と題し、水中写真撮影に関するエピソードや自然から得た教訓などを中心に進められ、奥尻島で北海道南西沖地震に被災した際の体験談を交えた自身の報道に対する姿勢を述べた。

水中写真を用いての講話では、流水や珊瑚、海に生きる動植物の営みを挙げ、陸上を含めた自然のサイクルを示し、それに対する人間の干渉が及ぼす影響を分かり易く説明、そして、地球環境の変化などに警鐘を鳴らした。



人材確保・育成協議会を開催

推進方針、実施計画などを承認

県協会では、平成19年2月20日（火）秋田ビューホテルにおいて、平成18年度秋田県建設産業人材確保・育成推進協議会（会長・川上洵秋田大学工学資源部長）を開催した。

協議会には、業界や行政機関、教育機関の代表者などを含めた11名が出席。

初めに、人材確保・育成推進協議会川上会長は、「社会資本整備である建設業不要論も言われているこのような状況に加え、3K、ベテラン技術者の退職により技術の低下が懸念される中、若い人達にどうしたら明るい夢を持たせられるか、優秀な人材を集められるか各界、各層の代表の方々にご意見を求めながら進めてまいりたい」とあいさつ。引き続き協議事項に入った。協議事項は次の通り。

1. 平成18年度新規学卒者採用状況について
2. 平成19年4月新規学卒者採用予定調査結果について
3. 最近の雇用失業情勢について
4. 平成18年度雇用改善推進事業活動状況について
5. 平成19年度雇用改善推進事業計画（案）について
6. 平成18年度高校生インターシップ及び現場見学会について
7. その他

以上の推進方針、実施計画について

てはすべて承認され、事務局は今後の事業に反映していくこととした。

引き続き行われた意見交換では、「価格競争が蔓延している中、求められているのは即戦力になる現場経験値の高い団塊世代の人。新規の採用は難しい」「いい人材を確保するためには、自分達（職場）の環境を少しでもよくしていかなければならない」「今現在2007年問題に対して危機感はないが、職人の引退の平均が70歳から75歳になっている現状から、10年先、20年先に職人が一斉になくなるのではないかと不安である」「公立高校では少子化により毎年500人生徒が減少しており、それに伴い学校の統合、学科の編成など、学校サイドも苦しくなっている」「義務教育の進路指導の中で、目的を持たせる『生き方指導』が必要。底辺の部分育てていくのが我々の義務と考える」「小、中学校の子どもたちへ土木建築の魅力をもっとPRし日頃から馴染みをつけたらいいのではないか」などの意見が出された。



東建IT研究会との意見交換会を開催

2月23日（金）、秋田県建設業会館別館大会議室にて、秋田県建設青年協議会情報交換ネットワーク構築検討WG（和賀幸雄座長）と東京建設業協会IT研究会（以下、東建IT研究会・児山満座長）との意見交換会が開催され、CALS/EC、総合評価落札方式等について双方で事例等を紹介した。

東建IT研究会は座長の児山氏（前田建設工業（株））を始め、9名で構成。電子納品対応、CALS/ECに関する教育をテーマに講習会の開催、

行政・他県協会との情報交換などを主な活動している。今回の意見交換会はその一環として、東建IT研究会



からの要請で開催された。

CALS/ECについては、双方の活動・取組や現状報告が行われ、その中、東建IT研究会より「建設IT対応スキル標準教育体系及び教育プログラム」の紹介が行われた。同プログラムはITスキルをレベル分けし、それに応じて何を習得すべきかを整理し示したもので、今後の取組として、各個人が自己のレベル診断を踏まえ、それに応じた研修モデルの提示することを目的とした「教育プログラム自己診断ツール」の策定が併せて紹介された。

学生・生徒による 建築設計作品コンクール

協会長賞に目黒裕也さん

今回で35回目となる「秋田県学生・生徒による建築設計作品コンクール」の表彰式が2月23日、県第2庁舎で行われた。

協会長賞には、「秋田工業高校改築計画～エコスクール・教材スクール～」と題した作品を応募した目黒裕也さん（秋田工業高校）が選ばれた。

社団法人日本建築学会東北支部秋田支所北田透支所長が「地域の自立・活性化、少子化・高齢化への対応など、社会性が強く反映された作品が多かった。審査にあたっては、実現性を重視する一方で、既成の概念にとらわれない未知の領域への挑戦を果敢に行うとともに、夢を与えてくれるような作品にも評価を与えた。このコンクールを通じて新鮮で柔軟な発想を持った建築技術者が排出することを期待する。」と挨拶した。



雄勝祈願祭

※上記の記事はホームページに掲載されています。

<http://www.a-kenkyo.or.jp>

情報コラム Vol.10

秋田県公共事業における新年度の取組

2月末に県内4会場で秋田県建設交通部による「技術管理業務に関する説明会」が開催され、▽事業別となっていた共通仕様書の統合▽条件付き一般競争入札の導入に伴う総合評価落札方式の変更▽設計VEの推進▽CALS/ECについて説明が行われました。

主なものは次の通り。

■秋田県土木工事共通仕様書（H19.4.1以降適用）について

- ・土木工事、農業農村整備事業等、森林整備工事を統合。3月中に県ホームページに掲載予定。
- ・工事請負金額が500万円以上の工事についてCORINSへ登録（受注・変更・完成・訂正時）。500万円以上2,500万円未満の工事については受注・訂正時のみ登録。
- ・交通誘導員は1級または2級検定合格警備員、建設業協会等が主催する安全講習会受講者を配置。検定合格証、受講証の写しなど確認できる書類を監督職員に提出。
- ・工事施工において、完成時まで創意工夫や技術力に関して所定の様式で提出することができ、内容によっては加点を考える。

■総合評価落札方式ガイドラインの改訂について

- ・条件付き一般競争入札を追加。これまでの公募（簡易公募）型指名競争入札の削除。
（事務フローの変更、入札後の技術提案等の審査「事後評価方式」）
- ・「実績確認項目」の評価ウェイトが「技術提案項目」に対し過度にならないよう加算点を設定。
- ・実績確認における評価項目の追加。

近代化 建築の 遺産

No.55

院内銀山

湯沢市雄勝院内



JR院内駅が併設された現代風の異人館

江戸時代初期、慶長十一年（一六〇六）、村山宗兵衛らによって発見され、最盛期にはわが国最大の銀山といわれたこともある。江戸期文化年間（一八〇四～一七）、秋田藩が直接支配する直山（じきやま）になってから生産量が增大。天保元年（一八三〇）から明治元年（一八六八）にかけて三十九年間の産銀量は一〇三トンに達した記録があるという。

銀山が栄えた頃、院内銀山町は戸数四千戸、人口一万五千人で、当時の久保田の城下町をしのぐといわれるほどの隆盛をきわめた。

院内銀山は明治八年（一八五七）に工部省管轄の官営となり、ドイツ人技師を招いて先進技術を導入、巨額の費用をかけて経営の近代化が図られた。明治十四年（一八八二）、明治天皇の東北御巡幸の折、自ら五番坑に入られ、坑内や諸工場を巡覧されたことから、坑道は以後「御幸坑」と呼ばれた。この時の光景が明治神宮外苑の聖徳絵画館に壁画として残されており、巡覧し

た九月二十一日が「国の鉱山記念日」にされている。

院内銀山には御幸坑のほか、山市堅坑、早房坑、不動坑などがあり、水抜き専用の大切疎水坑道もあった。

その後、明治十七年（一八八四）に古川市兵衛（一八三二～一九〇三）に払い下げられたが、この時期、しだいに産銀量が増大し、わが国を代表する銀山として再び栄えた。明治に入ってから総生産量は銀四〇〇トン、金一トンに及んだ。銀山はそれから古川合名会社を経て古川鉱業（株）に引き継がれ、昭和二十九年（一九五四）まで中小鉱山として稼働したが最終的に休山となった。

院内銀山跡は現在、秋田県指定文化財となっているが、明治初期、十分一にドイツ人技師の住宅跡（異人館跡）の石垣だけが残されている。そして後に、JR院内駅の敷地に煉瓦造りの近代的な異人館が復元されている。

（取材・構成／藤原優太郎）

イザベラ・バードと 明治の旅行家たち

藤原 優太郎

1月の終わり、所用があつて山形県金山町に行つてきた。国道13号が通る最上地方の小盆地にある金山の里は古くは街道の宿場として発展した町である。ここは明治の初め、日本の北国を旅した英国人女性イザベラ・バードが逗留した際、何かと印象深い思いを残した土地であつた。

齢47歳、ちょっと小肥りで紅毛のご婦人が書き残した旅日記『日本奥地紀行』は、異邦人の紀行本名著として今も多くの人に愛読されている。これは横浜港から日光、新潟、置賜盆地を通つたあと羽州街道を北上して北海道に至るまでの旅紀行で、本国の妹に宛てた私信第1信～第47信をまとめたものである。

明治11年（1878）という今から129年前のことである。当時はまだ外国人がすべて自由に日本国内を旅行できる状況ではなかった。しかし、日本政府は明治7年に「内地旅行規則」を定め、外国人にはいわゆる居留地から十里以内の遊歩区域を越えて内地へ旅行することを条件付きで認めるようになっていた。

開国間もない当時の日本の辺境を、それも外国人女性が単身で旅行するということは大変な勇気を要したものであろう。この年、バード女史はアメリカから上海経由で横浜に上陸し、東京の英国公使館に滞在した後、北国旅行に出発した。通訳兼従者の伊藤某という青年ひとりを伴つての勇氣ある冒険旅であつた。

7月16日、金山からの第19信では山形から最上金山までの様子を克明に描いている。

「新庄から険しい尾根を越えて非常に美しい風変わりな盆地に入った。ピラミッド形の丘陵が半円を描いており、その山頂までピラミッド形の杉の林で覆われ、北方へ向かう通行をすべて阻止しているように見えた。その麓にロマンチックな雰囲気のある金山の町がある…」

半円を描くように盆地を取り巻く山は金山のシンボルともいえる薬師山、中の森、鷲鷹森などの尖り山で並んでいる。ここに来る直前、彼女はスズメバチとアブに襲われひどい炎症を起こしていた。そこで伊藤青年が新庄から医師を呼びその手当てをしてもらうため、金山に3日ほど滞在している。病気などのトラブルに遭い、そこで受けた親切がもとでその土地の印象が良

くなるのは珍しくない。とにかくバード女史が感じた見知らぬ土地の好印象に金山の人たちは爾来、確かな自信と誇りを持って今に受け継いでいる。

山の風景が奇異に見えた町、金山は神室山地から流れる清冽な流れを用水として町に引き入れ、特産の金山杉を使った白壁造りの住宅を建てるなど環境美化に力を注いでいる。

どこにもあるようなありきたりの観光政策など施さず、あるがままの歴史風景を暮らしに取り入れた金山は、まさに東北の異境アルカディアといつても過言ではない。

ついでながら、この明治21年頃というのは山好きの自分にとって別にまた意味のある年となっている。同じ時期、幕末から明治15年まで東京の英国公使館で通訳、日本語書記官を務めたアーネスト・サトウという外交官がいた。奇しくも日本の各地を旅していた彼は、バード女史が金山を通過する前後、後に日本アルプスと命名された後立山連峰の針ノ木峠を越える山旅をしている。東北地方には縁がないが、彼が著した『日本旅行日記』などを見ると、外国人からみて、いかに当時の日本が不思議な魅力を持っていたかがよくわかる。日本の山岳史上、名高いW・ガウランドという人は外国人で初めて槍ヶ岳に登った登山家で、日本アルプスと命名した人で、アーネスト・サトウの友人だった。

このように近代スポーツ登山として日本アルプスの山々に最初に足跡を残したのは明治初期の来日外国人たちであつた。彼らが残した日本での幅広く奥深い行動記録を目にすると、英国人の冒険、探検好きの国民性が分かつて興味深い。こんどはアーネスト・サトウの著作の中で、知的冒険の旅に出かけることになりそうな気がしている。



金山のシンボル、薬師山の山並み